

表現(作文)指導の一試み

——三分間スピーチを活用して——

田 中 宏 幸

一、はじめに

一九八一年十一月、全国連第十四回研究大会兵庫大会で、神戸大学助教教授浜本純逸先生の研究授業を拝見した。その後の研究協議において、浜本先生に二つのことをお尋ねしたことを思い出している。一つは「生徒の書く意欲をどうひきおこしたらよいか」ということ。もう一つは「取材、構想など各段階での指導法については、参考となる研究や実践が多いが、それらをどう体系化すれば、一貫性のある作文の授業を組み立てることができるか」ということであった。その際の浜本先生の御助言はまたあとで触れるとして、この二つの問題意識をどう掘り下げていくかということが、そのまま今年度のこの実践につながったように思われる。

過去八年間の私の授業は、ややもすると読解・鑑賞に傾きがちで、書く力に關しては、中学校までの国語の学習や、各自の日常の自主的な学習に依存してしまうのが常であった。小説を学習する際に第一次感想文を書かせたり、夏休みに読書感想文を書かせたりなど、月並みなことは試みるが、ほとんどの生徒たちは、やむをえず原稿のます目を埋めているにすぎず、意欲の乏しい作文が大半であった。一度書いて、それっきりになってしまわない指導法はないだろうか。

書く意欲を喚起する指導法はないだろうか。

一年間の見直しをつけることができ、しかも指導者の側が途中で音を上げてしまわずにすむ方法はないだろうか。

個別指導を何とか全体指導へ還元する方法はないだろうか。あれこれ欲張ったことを考えながら、今年度の現代国語の授業にとり入れてみた表現指導法の報告である。

二、四年前の実践

一九七八年、前任校加古川東高校で、高校二年生を対象に、五分間スピーチを試みたことがある。

加古川東高では、文系コースを選択した生徒を対象に、週一時間「作文教室」が特設されていた。作文指導を独立させて一年間の授業を組むのは、私にとって初めての経験であり、暗中摸索する思いであった。短文練習をしたり、四百〜六百字の文章を書いては、共同批評したり個別添削したりしながらも、毎時間が少々苦痛に感じられる時間であった。五分間スピーチは、こうした悪戦苦闘の半年余りを経た上でたどりついた方法だった。「高校生のための文章読本」本間徹夫著、一光社刊より着想を得た。

毎時間、五名がスピーチ、その後批評会という展開で、九時間を以て終了した。

この方法で、やっとそれなりの手ごたえを得たものの、二クラスを担当していたので、毎週十名分の個別指導に、昼食も返上して時間を費やさねばならず、力の少し不足する生徒に充分な指導ができません。また、スケジュールの消化に追われた感が強かった。

三、今年度の実践概要

(1) 日時 一九八二年四月～一九八三年一月。

週に三時間の現代国語の授業のうち、毎週一回、曜日を選定し、授業の冒頭十～十五分を使用。

兵庫立加古川西高等学校

(2) 対象生徒 三年四組(男七名、女三九名)

三年八組(女四六名)

(3) 学習目標

- ① 説得力のある意見文を書くことができる。
- ② 自己の問題意識を高め、生活をよく見つめるところから、自分の意見を掘りおこすことができる。
- ③ よい聞き手こそよい話し手を育てるということが自覚でき、聞き上手になることができる。

その他、数多くあげることができるが、今は主たるものを掲げるところとどめる。

(4) 導入

新学期の最初にオリエンテーションとして、「現代国語通信No.1」を配布。三分間スピーチの要領を伝えた。

また、話題探しの一助になればと、四年前の五分間スピーチの題目一覧を渡すとともに、刺激する意味あいもかねて、模範的なスピーチ

ーチ(四年前のスピーチを録音しておいたもの)を聞かせた。「現代国語通信No.1」では、次のような記事を載せた。

※三分間スピーチが成功するための秘訣教えます。

- ① 話題の新鮮さが何よりの命。『三本のキ(やる気・根気・元気の類)を贈ります』なんて話はダメ。
 - さっそく今日から話題探しにかかろう。体験したこと。関心のあること。みんなに考えてほしいこと。自分が日頃考えていること。その気になればいくつでも見つかる。話題の豊富な人は人間性に幅のある人。
 - ② 話のまくら(序論)で、聞き手の耳をひきつけよう。どんな話が始まるか、興味をもたせることが大切。簡潔に、無駄をなくして。くどくど言いわけは絶対にしてない。
 - ③ しめくくり(結び)を簡潔に。
 - ④ 耳で聞いてわからぬ語句(漢語など)はさける。どうしても使いたい時は、言いかえも考えておく。
 - ⑤ 落ち着いて話す。ゆっくり話す。
 - ⑥ 顔をあげて話す。心をこめて真剣に。
 - ⑦ 聞き手の反応を感じながら話す。
 - ⑧ 発表する前に、必ず声を出して読みあげておく。
- 話の要点を整理して頭の中に入れておくために。文章の運びを再チェックするために。

※聞き上手ということ

① 話をする人はただでもあがりやすい。

話のしやすいムードを作るか。

そのため

(ア) 拍手で迎える。私語や野次は慎しみ、話し手を援助する気持ちで聞く。

(イ) 顔をあげて聞く。なるほどと思つたら軽くうなずいたり、変だなと思つたら首をかしげたりする。(但し、ワザとらしくやつてはいけない。一所懸命聞いていると、自然とそういうしぐさになるものだ)

② 言いまちがいがあつても馬鹿にするような笑いは禁物。

話し手の言いたいことを推察してあげよう。

③ 話の仕方や内容でよいと思うことはすかさずメモしておく。

(5) 展開

① 事前の原稿提出

本来ならば、メモ原稿にすべきであるし、その方がスピーチはしやすいのだが、原稿用紙の使い方や、表記・用語についても指導できるようにするため、必ず全文を千二百字程度で清書の上、三日前に提出することを義務づけた。

② 個別指導(昼休みや放課後を活用)

題のつけ方・話題のしぼり方・論の展開の仕方・用語・表記に至るまで、極力丁寧に添削指導した。生徒と話しながら、時には

ヒントを与えるだけで、全文書き直しを命ずることもあり、各自の力に応じて指導内容に幅をもたせた。

前述したように、この一連の指導の目標は、まずは、わかりやすく説得力のある意見文を書くことができる、という点に置いている。従つて、指導の重点は、どちらかと言えば、論の展開の明快さに置かれることになる。恥ずかしいことだが、それが最初から明確に意識できていたわけではない。随筆あり、物語あり、紹介文ありでかまわないと考へていた。しかし、スピーチという形態をとる以上、自分の意見をどうしたら人にきいてもらえるか、何を言いたいのかわかつてもらうためにはどんな具体例をとりあげたらいいのか、など、意見文を書くのだということを明確にしておいた方がいいのだと思へるようになってきた。その方が生徒も文章が書きやすいようである。どうしても文章がまとまらないという生徒には、対話の中からその生徒の言いたがっていることを聞き取り、アウトラインを図式化するところまでアドバイスしていった。そうすることで、「そうですね。そういうことが言いたかったです。」とすっきりした顔で帰っていく場面にもしばしば出会った。

③ 本番

毎週一回のスピーチ・デーには、二人ずつスピーチを行なった。カセットコーダーを用意し、録音。記録が主目的だが、適当な緊張感を与える狙いもある。

他の生徒は、二人のスピーチ終了後、すぐに批評カードを記入。

今年度は、二人のうち任意の一人について批評させた。時間的制約が主たる理由である。一方に片寄りすぎて、他方がほとんど批評を

もらえない事態も生じるのではないかと心配したが、実際にやってみると、少々片寄ったとしても、二対一ぐらいの割合にとどまり、適度なバランスを保つようである。また、批評カードの枚数の多寡が自然な競争意識を生み、いいスピーチをしようという意欲にもつながったようである。なお、批評カードについては、後でもう少し詳しく触れたい。

④ 事後

数日後に、感想ならびに反省を記し、最初原稿とともに提出。この時、批評カードも提出させた。相互批評の実態を知るためである。その後、適当な時機をみて、指導者のコメントをつけて返却した。

⑤ 全体への指導

約五分間で、批評カードを記入させた後、折にふれて、全体にむけてアドバイスすることを心がけた。

ほとんどが、「現代国語通信No.1」で年度初めに伝えておいたことではあったが、その日の二つのスピーチを比較してそれぞれの長所を指摘したり、本番に至るまでの裏話を紹介したり、既にスピーチを終えた人の感想を紹介しながら、次のような内容に触れていった。

- ・ 論の展開の仕方（起承転結などの構成法）
- ・ 話し始め（書き出し）の大切さ
- ・ 一文を短くすること
- ・ 修飾語の位置（長い修飾語を先に書く。短い修飾語を被修飾語の直前に）
- ・ 魅力的な題（○○について）は避ける
- ・ あがらぬための秘訣（誰か一人に話しかけるつもりで）

・ 聞き上手がいれば話し手も上手になるということなど、一回一話に絞って、一、二分のアドバイスを試みた。

このアドバイスの影響力は、予想以上に大きいものであった。例えば八組で「このクラスは、どうも話題が、私を語るということに限定されすぎているようだ」と、四組のスピーチを紹介しながら、一言言い添えておくと、すかさず老人問題や自然破壊の問題などと切りあげられるといった現象がおこった。あとでスピーチする生徒ほどレベルの高いもの、内容の深いものができるように、それとなくしむけてやるのが大事なのである。その為にも、この全体への一言をどう生かすか、私の側も、次第に細かく気を配るようになった。

⑥ 批評カードについて

三分間スピーチ批評カード			
() 月 () 日	() 話者 ()	() 評者 ()	()
() 題 ()			
項 目	評	項 目	評
主題の明確さ 言いたいことがはっきりと伝わってくるか。		表現・描写のうまさ 場面は鮮やかに描かれているか。	
構成・展開のよさ 話の組み立て方はどうか。		聞きやすさ 発音、声量、スピード、ていねいさ。	

特に話し始めはどうか。

特に結びはどうか。

話題の新鮮さ

魅力ある話題か。
生き生きとしてい
るか。

評 ◎…大変よいと思う
△…まあまあである

総評ならびに感想

○…よいと思う
×…もっと工夫してほしい

欄が不足すれば裏へ

右に掲げたB6の大きさのカードであるが、このカードについてはさまざま検討の余地がある。

例えば、評価項目。「問のとり方」「言葉づかい」など細分化して、あれこれ観点を示すこともできよう。話し方指導ということに重点を置くのであれば、こうした項目も必要かもしれない。今回は「読み手(聞き手)によくわかる説得力のある意見文を書く」ということが、まず第一の目標であったから、右のような評価項目にしてみたのである。あまり細分化しすぎて、それにとらわれすぎるよりも、この場合は、おおよその観点を示しておいてやればよいという気持ち強い。それでは大まかすぎるであろうか。

また、◎×という四段階の評価より、よい項目のみに○印をつける方がよいと指摘される方もあろう。長所のみを見つけていくという方向づけをする意味では、それも一理あるが、実際には、△印や×印をつける生徒は数少ないので、結局は同じことになるだろう。ただ、かえって厳しい批評を望む生徒も少なからず存在しており、また空欄のまま手渡されるよりも何らかの反応をもらえることの方が張り合いがあるという意味で、この評価法でさしつかえはなかつたろうと判断している。

四、まとめ

生徒たちは、この実践に対して、悩み苦しみ、また恥ずかしがりながらも全力投球してくれた。それはいったい何故であろうか。中間時点にあたる一学期末に書かせた感想と、スピーチ終了時に書かせた感想とから、生徒のうけとめ方をまとめると次のようになる。

- ① 人間的なふれあいを実感できるということ。
- ② 「友人の意外な一面を知ることができた。」
- ③ 「今まであまり親しくなかった人に対しても共通の話題ができる

し、その人のことを知る上でもいいことだ。」

など、ほぼ半数の生徒が感想の真先にこのことをとりあげている。成績が芳しくなく、学校に来ることすらしんどそうにしているK子までも、

・「金^{マイ}よう日は楽しみやった。だから金よう日はしんどかっても頑張って学校に來たし、なにより友達^{マイ}の知らないような緊張の一面を見ることができて、最高^{マイ}おもしろかったです。」と書いてくれた。

このように生徒たちがうけとめてくれたものこそ、私自身がまず国語教室づくりにおいて大切にしたいと願っているものである。とりわけ現代国語の授業は、生徒相互のコミュニケーションがまず成立していなければ、生き生きとするはずがないからである。そのためにも、今回の実践は意義あるものであったと言っただけであろう。

② 成功感、充実感を実感できるということ。

三分間スピーチを実際にやってみるまでは嫌がる生徒が大変多いしかし、スピーチ終了後の感想は必ずといていいほど、「やってよかった」と書いてくれている。

・「三分間スピーチをするまではやめたらいいのにとばかり思っていました。しかし、あがりながらもやってみて、終わった時、何か大きいことをやりとげたというようなとてもいい気分になりました。」

といったふうにある。

こうした効果が生まれるには、「批評カード」が大変重要な役割を担っているということを見落してはならない。ただスピーチをし

てそれで終了としたのでは、このようなふれあいや充実感を実感することはできなかったであろう。一所懸命やればやるほど、私たちはその反応が知りたくなるものである。その機会を意図的に作り出してやるのが大切だということであろう。

・「この三分間スピーチで欠かせないのは、やはりみんなの批評だと思っています。これがなくて三分間スピーチをするだけなら、後で、このスピーチをしてよかったなんて、それほど感動しなかったと思います。」

・「思いのほか話をよくきいてくれたんだなあと、とてもうれしく思いました。ほめてくれるのもうれしいけれど、鋭い指摘をもらえたりすると、本当によかったなあと思えました。」

ただ、今回、二人のうち一人についてしか批評できないようにしたことについては、生徒の中に批判がないわけではない。

・「比べられるようでいやだし、評をもらうなら、できるなら、全員から評をもらいたいです。」

だが、私は、これについては改めるつもりはない。一人にしほること、投げやりな批評やおふざけの批評、あるいはまた辛辣すぎる批評を避けることができ、気の小さい生徒も、ほとんどはいい評価をもらえて自信をもつことができるからである。

③ 「ものを見る眼」を育てるということ。

学習目標の②にあげた項目であるが、スピーチ終了後、こうした点に気づく生徒が増えてきた。

・「日常のことひとつとりあげるにしても、見方によって、何でも話のタネになり、奥まで考えれば考えるほど煮つまってくるんだ

っていうことを学んだような気がします。」

• 「自分はどんな話にしようかと思うと、まわりのささいなことに
も気をとめるようになりました。」

• 「私が何気なしに見すごしてしまっていることを、スピーチで
やってくれているのをきいていたら、目が四つぐらいになった感
じで、いろんな角度からものが見られるような気がする。」

自分を見つめ直し、身の回りを見つめ直すよい機会になるという
ことにも、生徒は自覚的である。書く意欲をかきたてることができ
れば、一人一人は自然と「ものを注意深く見る」習慣を身につけて
いくということなのであろう。意見文を中心にするにすれば、問題
意識は高まり、自分の意見をもつことで、自己確認にもつながって
いく。三分間スピーチは、こういう点においても有効なのである。

④ ことばへの関心を高めるといふこと。

• 「みんなのスピーチを聞いていくたびに、聞き手の注意をひくに
はどうしたらいいのか。また問のとり方は：なんて考えるように
なったし、本を読んでいても、いい表現があれば注目してみたり
するようになった。」

• 「聞いてよかったと思えることは、時々、言葉の言い回しに新鮮
な衝撃をおぼえることです。」

このように、ことばに対する感覚をとぎすまし、読書など日常の
国語生活にも影響を及ぼしている。言語事項に対する指導はまた別
に組まれねばならないが、ことばに対する関心を高め、国語学習へ
の意欲を育てる上でも、この実践は意味あるものであった。

⑤ 人前で話す経験になるということ。

このことについては多言を要しないであろうが、生徒たちは案外、
改まった形で人前で話す経験をしていないものである。小学校以来
だという生徒も多かった。各授業で発表する機会は少なくないはず
なのに、たまたま、その機会に恵まれなかったというだけなのだろ
うか。それとも、それらは「人前での話」として意識されてこなか
ったのだろうか。いずれにせよ、今の高校生たちには、何らかの形
で、少々改まって何かをする機会を用意してやる必要があるであ
るように思われた。

文章構成の仕方がわかる等、言うまでもないことを除けば、三分
間スピーチを活用した表現(作文)指導の意義は、おおよそ、以上
の五点にまとめることができるだろう。

五、反省と今後の課題

一方、反省すべき点も多い。

一つは取材指導に関してである。今回の実践において、とりたて
て取材指導は行なわなかった。原稿提出日のぎりぎりになって、話
題が見つからないと泣きついてくる生徒も何名かいた。話題探しに
困ったと感想に記した生徒も半数近くいた。それでも全体にむけて
特別の取材指導をすることはしなかった。何について話そうか、そ
れを悩み続けることは確かに辛いことではあるが、それは逆に楽し
いことでもある。また、泣きついてくれば、それからその生徒との
対話が始まるわけだし、そこで、焦点のしぼり方や新鮮な切り口を
示してやればそれでいい。そう考えたからである。

しかし、別掲の題一覧を見ていただいてもわかるように、「ダイ
エット失敗談」のように個人的体験を述べるにとどまったものから、

「アルタイ語系日本語」のように日本語そのものについて論じたりするものまで、内容のレベルの差はかなり大きくなってしまった。この差を縮めるためにも、やはり何らかの取材指導が必要だったのではないかと反省している次第である。

例えば、「話の種ノート」を作成させて、日頃から思いついたことをメモしたり、心に残った新聞記事を切り取り貼りつける習慣を身につけさせるという方法もあったろう。あるいは、月毎にテーマだけは設定しておき、そのテーマに添って話題探しをさせるという方法もあった。高校生の段階では、スピーチが成功するか否か、その八割ぐらいは、どんな話題をとりあげるかということにかかっているようである。それだけに、取材指導をもっと重視すべきであったと思えるのである。

二つめは、対象学年である。浜本先生は、全国運兵庫大会での私の質問に対して、次のようにお答えになった。(御発言要旨)

「指導過程の一貫性については、今日の研究授業のような部分学習を積ませて、長い作文にとりこんでいくときに生かしたい、という事です。一年は語彙を豊富にすること、二年は構想、三年は味わいのある文章というように学年目標を立てることもできます。」この学年目標という御指摘からいっても、第二学年でとりくむべき実践ではなかったかという思いが強いのである。今回の実践は、結局は構想指導に重点を置くものであったからである。また、進路決定を間近に控えた二学期後半に順番がまわってきた生徒には少々酷な課題となった。それにしても生徒たちは実に熱心にとりくんでくれた。ありがたいことだと思っている。

三つめは、この実践を次はどう乗りこえていくかということである。この実践は、生徒たちにとっては一回限りのものである。同じことを二度、三度とやらされるのでは、惰性に流されかねない。このスピーチで実感できた充実感と成功感とを、次にどう生かすことができるか。大変難しい問題であるが、今後の実践の中でとりこんでいきたい課題である。

その他、書きことは(原稿)と話しことは(スピーチ)との話体の差をどうするか等、検討すべき点も少なくないだろうが、参考として後掲する生徒作品を読んでいただければ、生徒はその差などずんなりと乗り越えているということをご理解いただけるのではないだろうか。

私の報告は以上である。教職九年目にして、やっと、ひとまとまりの実践が可能になったように思える。大学在学中、野地潤家先生に「十年一テーマのつもりでやりなさい。」と教えていただいたことを思い出す。この実践を次の十年間の実践の礎としたい。

〈参考1 生徒作品例〉

関西弁、ばんざい！

三年八組 釜江知子

高二の修学旅行で、私は意外なことを聞きました。初めてのスキーを楽しんでいた時のことです。私たちの班のコーチが、私たちのはいでいる姿を見ながら、ぼつんと「関西弁は、きつくて、怖

い。」と、つぶやいたのです。私たちは一瞬、黙ってお互いの顔を見合せていましたが、次の瞬間には、みんな一斉に東京弁の悪口を言って、関西弁を弁護しました。その時は、私もいっしょになって騒いでいたのですが、しばらくすると、「やっぱりそんなものかなあ。」なんて思いました。というのは、私と私の兄に、関西弁に苦しみられた体験があったことを思い出したからです。

私の家族は、私が神吉に生まれるとすぐに父の仕事の關係で愛知県に引越しました。当時六歳の兄は、愛知県の小学校に入学しましたが、すでに関西弁のアクセントが身についてしまっていたために、授業で本読みをするたびに、クラス中爆笑の渦でした。担任であった若い女の先生は、純情な少年をいじめるのが国語の時間の唯一の楽しみのように、本読みとなると絶対といていいほど兄を当てたので、とうとう兄は暗い性格になってしまいました。私はというと、初めて覚えた言葉が愛知弁なので兄のような苦労もなく、明るいうちに成長しました。

四年間、愛知県で過ごし、兄の言葉もすっかり愛知弁に染まった頃、またまた父の転勤で神吉に逆もどりです。今度困ったのは私でした。言っていることが全くわからないのです。何か言うと、最後に必ず、「なー」というのをつけるし、それにまぎらわしいのは、幼稚園の友達が、言葉をまちがえて言うことです。例えば、「からだ」のことを「かだら」と言うのですが、私にしてみれば、それも関西弁の一種だろうかと真剣に悩み、その他いろいろなこともあった。一週間、幼稚園を登校拒否しました。

一方、兄の方は五年生になっていたのですが、そのクラスの先生

は、とても言葉にうるさい人で、兄のきれいな愛知の言葉を重宝して、黒板の端に、「釜江君の言葉を見習おう!!」と書いたものだから、兄はすっかりうれしくなって、その時から明るい性格になりました。でも妹の私が、例の「かだら」という言葉の意味について真剣に悩んでいたというのに、兄は全く知らん顔でした。今考えてみれば、兄はきっと、今まで私が兄とちがってあまりにも順調に明るく成長してきたので、ひがんでいたにちがいありません。

さて、ここまでが私たち兄妹の関西弁にまつわる体験談です。今振り返ってみると、あの頃の私たちにとって、関西弁はきつくて怖い言葉でした。私たちの心を暗くする悪者とさえ思えました。だから、東京に住んでいるコーチがああ頃の私たちと同じ様に、関西弁をきついと感じるのも当然のことだと思えます。でも、関西にもどって十五年、私はあれほど怖くていやだった関西弁が、いつのまにか大好きになってしまっています。それはきっと、私が成長して、関西弁のもつ暖かさ、人間味がわかってきたからだと思うのです。

私たち日本人は、標準語という一つの完璧な言葉を持っています。これは、日本人にとって決して忘れてはならない大切な言葉です。でも、関西の人にはもう一つ、関西弁という言葉が人と人との心を伝えるために、どうしても必要だと思えます。こう考えてみて初めて、「日本中のいろんな地方の人々が、標準語と、心を伝えるその土地の言葉とを大切に使っている。」という当り前のことに気がつきました。

でも、やっぱり私は関西人です。将来もできることなら関西に住みたいし、もし何かの事情で、他の地域に住まなければならなくて

も、関西弁を家庭の中だけでも使い続けて、関西の人間味のある雰囲気をつまでも大切にしたいと思います。

〈参考2・生徒の感想例〉

正直言ってあんなに笑ってもらえるとは思ってもみませんでした。朝、登校する前に、何回か読む練習をしたけれど、読めば読むほど、しようもない事を書いたような気がして、自己嫌悪に落ち入りました。今は昔のことですが、高一の時、フォークソング同好会のコンサートに出て、演奏の合い間に、ついしようもないことを言っただけで、学校へ行っただけです。

そして四時間め、開き直って前に出ると、なぜか心が静まってきました。顔の筋肉はひきつったままで、変な顔をしてスピーチを始めました。初め、みんなシーンとしていたので、私は心の中で「ほらほら、やっぱりなあ」と半分いじけ気味でしゃべっていました。ところが、真ん中頃になると、急にみんな笑い出すじゃありませんか。私はとても信じられませんでした。私は、一度同じクラスになった人なら誰でも知っているほどの、すごい笑い上戸なので、ここで笑うと当分笑いが止まらなくて、先生のカセットテープが笑い声だけで終わってしまいそうなので、これはいけないと思って、必死に笑いをこらえたゆがんだ口で話を続けました。みんなも、まじめな内容の所は真剣に聞いてくれて、私は十分満足してスピーチを終えることができました。

さて、批評カードのことでありますが、私がスピーチをする前は、人の批評を書きながら「私の時は何枚あるかなあ」とか「少なかったらどないしよう」とか思っていました。スピーチを終わってみると、不思議なくらい枚数のことなんか気にならなくて、むしろ気にしていたことがあほらしく思えたのです。そして、もらった批評カードを見ては、どれだけみんなが真剣に聞いてくれたかを知り、本当にうれしくありがたく思いました。それとともに、あとわずかの人のスピーチを、より真剣に聞いて、よりの確な批評しようという気持ちになりました。

この三分間スピーチ、初めは「なんでこんなことすんのんよう。人前で話すのん嫌いやのに。」と思っていましたが、してみると、いろんな点で良いことばかりでした。

まず一つは原稿用紙の使い方のきまりがわかる。でも私は「かぎっこ」の使い方がまだどうもはっきりしません。その点はさて置いて、二つには、クラスメイトの心の暖かさ、広さがわかる。私の場合、しようもないことでも友情で笑ってくれる。これが最高です。そして最後に自分の心の中で思っていたことを人の前で話すことによつて、その思いがより深まる。私は関西弁が好きだということをもみんなの前で話したことにより、よけい好きになりました。まだまだたくさんあるけれど、本当にこのスピーチやってよかったなあと思います。よい体験をしました。これからもずっと続けてほしいと思います。みんないやがるかもしれないけど、それはやらす嫌いにすぎないのですから。

(釜江 知子)

へ参考3・三分間スピーチ題一覧

※三年四組

- 1 私のアニメ論
- 2 鬼の藤本先生
- 3 何のための軍事費か
- 4 僕の季節
- 5 私のアニメ論
- 6 テレビ「第三の波」を見て
- 7 日本の食料問題について
- 8 コピーの時代から独創の時
代へ
- 9 女らしさとは
- 10 一円玉の寂しさ
- 11 マネージャー活動
- 12 空想
- 13 やさしいという言葉を使わ
ないでください
- 14 言葉を発すること
- 15 軟弱化した少年漫画
- 16 物も言いよう
- 17 全国一弱い野球部と私
- 18 私たちは本当に太りすぎ？
- 19 スマイル
- 20 外向性と内向性
- 21 個性を生かすこと

22

- 22 生きる勇氣
- 23 失って得たもの
- 24 猫的人間
- 25 女の習性
- 26 いなか論争
- 27 完璧への憧れ
- 28 占いは信じられるか
- 29 理想を追いかけて
- 30 誤解を恐れずに
- 31 ぶりっ子の本性
- 32 他人の行動が信じられない
時
- 33 私の結婚観
- 34 私のペット観
- 35 私たちの高校生活
- 36 音楽について
- 37 スピーチのあり方
- 38 毎日をより楽しくすごすに
は
- 39 夢は不思議だ
- 40 聞きあきた注意
- 41 もてるための条件
- 42 兄弟の必要性
- 43 女性として生きる
- 44 口もとに出る内面性
- 45 二種類の恥
- 46 資格をとるむつかしき

※三年八組

- 46 私の生い立ち
- 45 校庭の片隅で
- 44 古代の村を訪れて
- 43 ヤクルト少女
- 42 猫の桃子ちゃん
- 41 私の趣味
- 40 私の家族
- 39 登喜ちゃん
- 38 夢の不思議あれこれ
- 37 チンドン屋志願？
- 36 金色のあいつ
- 35 マネージャーの仕事
- 34 小さな居候
- 33 ギザギザの卵
- 32 私の霊体験
佳依
- 31 水泳部の思い出
- 30 しっぺ返し
- 29 悲劇のアイドル
- 28 片思いの効用
- 27 ワンワン騒音
- 26 お茶の心
- 25 This is my speech
- 24

23

- 23 思いやりの心
- 22 英語の進出
- 21 ダイエット失敗談
- 20 趣味の発展
- 19 二度童子
- 18 日本のお母さん
- 17 心配性人間の生き方
- 16 自然への侵略
- 15 ささやかな反抗の試み
- 14 アクシデント
- 13 関西弁ばんざい！
- 12 私の理想
- 11 女性も社会に出ましよう
- 10 言葉のおもしろさ
- 9 あっけらかんとしたたかに
- 8 写真嫌い
- 7 私の進路
- 6 あたま大丈夫？
- 5 失いつつある感覚
- 4 アルタイ語系日本語
- 3 世の中変われば変わるもの
- 2 里親の体験から
- 1 競争社会の中で
(番号は出席番号。右から
発表順に並べた。)

一九八三年二月三日記
 (兵庫県立加古川
 西高等学校教諭)